

女子美

No.159/2008



- 2P ファッションデザイナー 宇津木えりさん特別インタビュー
- 6P 女子美祭2007
- 8P 絵本作家 工藤ノリコさん女子美祭 記念講演
- 10P インテリアトレンドショー、女子美術大学学生作品展
- 11P 書画教授 仲俣正義 先生 特別授業、Helvetica歌写会
- 12P 空の水族館、松井 冬子さん 批評会に参加
- 13P サマースクール報告
- 14P クローズアップ
- 15P 女子美スタイルは最新鋭、ガレリアエッセ OPEN、ICT賞が受賞
- 16P 特色GPIに選定、並崎大村美術館開館、他
- 17P グランドプレミオ学校賞受賞、他
- 18P 100周年記念大村女子基金
- 19P 女子美アートミュージアム展覧会情報
- 20P 公募展受賞者紹介、シリーズ 女子美探訪

Lecture ● 1 卒業生講演会報告 ファッションデザイナー 宇津木 えりさん 主催：ファッション造形学科

オリジナルブランド「メルシーボーケー」を立ち上げファッションデザイナーとして活躍中の宇津木えりさん。学生時代は「とにかく楽しくて、好きなものをおっかけて」、頑張っていたそうです。9月28日に実施された特別講義では、ご自身が現在に至るまでの、等身大のお話をしてくださいました。進路に悩んでいた時期に「ものをつくることは自分の宝だ」ということに気づいたというお話は、心を揺さぶられるものでした。



歌と踊りが大好きだった学生時代

私の母が洋裁をやっていて、子どもの頃から生地にかこまれて、手作りの服をつくってもらっていました。昔は今みたいに安い服がなかったので、なかなか買ってもらえずに作ってもらっていました。私はおしゃれが好きで、スタイルブックを見ているのが好きでした。いつか自分でつくって、自分で着たいと思っていました。とにかくおしゃれがしたかった。

子どもの頃は、チビッ子歌まねが流行っていた時代でした。実は、小5から中1までテレビに出まくっていました。バレエを習っていたこともあって、踊りも歌も大好きでオーディションに合格して…。キャ

ンディーズのものまねで、私はランちゃん担当。ミキちゃん担当の子が受験のため親に反対され、その後、ピンクレディブーム到来で、またオーディションを受けて活動してました。長山洋子ちゃんがライバルだったのです(笑)。先日明治座公演に当時の相棒と行って、楽屋であいさつしてきました。もちろん覚えていてくれて嬉しかったです。

そのまま、中学・高校時代も、音楽、歌、踊りが好きで、ジャズダンスやバンドをやっていました。将来の希望は、美容師かスタイリストかダンサーになりたいなと思っていました。当時、洋服をデザインしてつくことはリアルでなかったですね。「自分の考えた服をつくる」ということは考えていませんでした。

高校3年で進路を決める時に、知り合いの人から、親が洋裁をやっているのだから、デザイナーとかの方が、就職もあるのではないかと、助言をもらいました。絵の勉強も普通の勉強もしてなかったのですが、頑張れば女子美には入れるかもしれないと思い、夏から勉強を始めました。デッサンも平面構成もわからず、ボードに紙を張ることもできなかったので、周りに教えてもらって、必死に勉強して合格したのです。

女子美にきて、美術やファッションが好きな友達に囲まれて刺激もあって楽しい学生生活でした。同時に、ジャズダンスにも燃えていました。1年生の時、9月に公演があり、一世風靡セピアと一緒に発表会をしました。真剣にやってみて、二兎追うものは一兎も得ず、だ々と自分の中で気づい

たのです。忙しくて、せっかく洋服をめざして女子美に入ったのに、何をやっているのだらうと思いました。自分を客観視して、ダンサーになるには、容姿も才能のうちだなと感じて、きっぱり諦めました。そこから洋服を目指そうと、自分の気持ちがひとつに決まったのです。

美しいことはひとつじゃない

卒業後、このまま就職するのは不安だなと思っていたのと、海外に行くことに憧れがありましたので、エスモード・ジャポンに1年行きました。パリに絶対行きたかったので、3月に辞めて日仏学院に入りフランス語を勉強して、8月にパリへ行き、9月からスタジオオベルソーに入学しました。日本人はクラスに2人くらいで、ほとんど言葉はわからなかったですね。でも、みんな親切だったので、わからないことはわからないと言えば、教えてくれたのです。学長のマリーさんがファッションの雑誌を見ながらコメントするおもしろい授業があったのですが、言ってることが、なんとなくニュアンスでわかって不思議でした。

フランスに行くと、自分の中でショッキングなことがありました。その頃は、自分の中では、肌が白くて髪の色が金髪の人がいい、という考えというかコンプレックスを持っていたのです。ある日の朝、鏡の前でこういうのはそういう人に似合うんだろうなと思いながら、インド系の素材の薄いグリーンのスカーフを巻いて学校に行きました。すると、フランス人の女性の先生が駆け寄ってきて、「エリ、あなたの髪と肌の



mercibeaucoup, 2008 S/S collection

色とそのスカーフの色が超ステキ!」と絶賛されたのです。驚きました。私が思っていたことと逆のことを言われたのです。そこで、美しいことはひとつじゃないな、と思ったのです。ショックを受けると同時に、嬉しかったですね。美しいということの中で決めつけることはやめようと思いました。このことは今でも自分のテーマになっています。

パリは、1年という約束だったので帰ることになりました。自分の中で、ただデザイン画を描いているだけじゃなく、早く実践して、仕事して、覚えていきたい、という思いが出てきた時でした。ちょうど、小野塚秋良さんが、ZUCCaのスタートをする前で、紹介して頂いて就職しました。2年半、働かせて頂きました。社会人1年生を勉強させて頂きましたね。デザインよりも、会社の中で、社会人としてのことを、一から全て教わりました。

ものをつくることは自分の宝

会社を辞めてから、コレクションブランドではないところに行こうと考えたり、洋服に八つ当たりしていましたね。洋服なんか!と思って、車の運転が好きだからトラックの運転手を目指し、一週間やったのですが向いてなかったようです。身体が小さいから、マニュアル車のクラッチに手が届かない。本当に体力仕事で、危ないし、事故をおこしたら大変だと思って、辞めました。その後、洋服の世界で就職活動したのですが、自分の中で本当に就職する気持ちがなくて、受からなかった。本当にくさっていました。

自宅だったので食べることには困らなかったのですが、おこすかいもなく、このままではダメだなと思いながら、昔、自分でつくったニットのジャケットをほどこいて何かつくろうと思いました。その時に、自分でほどこいて編みなおしながら、思わず

涙が出たのです。本当に編むという行為が楽しくて、「ものをつくることは自分の宝だ」ということを発見したのです。ものがつくれていれば、最低限自分が保てる、と思えたのです。やっぱりものづくりなんだと思って、気持ちが変わって、そこで、もう一度就職活動をしたら、合格しました。その時は、コレクションブランドでなく「洋服をつくって売る」営業中心のところに行きました。

109系の服をつくる会社に5年いました。そこでは、実践できて、勉強になりました。自分がデザインしたものをパタンナーに伝えて、原価計算して、売っていくのです。ただ、その会社が売っていく洋服のテイストがどうしても自分にはわかりきれなかった。やはり、好き嫌いはどうにも変えられない、ということがわかりました。私はくそまじめなので、テイストが違うために、自分が貢献できていないことや、売れないことが、とても辛かった。ものがつくれても、喜んでもらえないのは辛いことです。そこで、同じテイストの人に向けて作らないと、自分を生かせないんだということに気づきました。

その会社にいる間に、結婚して子どもを産みました。そんな時に、知り合いから募集があったので、新しい職場にトライしたのですが、何かとうまくいかず、仕事も窓際みたいになってしまって、自分の先行きが不安になりました。不思議と何かが変わる時には、いろいろなことが変わります。そのころプライベートでも転機があって、シングルマザーになりました。

人に夢を与える仕事をしたい

そういういろいろな経験をして、コレクションブランドをやりたい、という気持ちが湧いてきました。今ならこれまでの経験が活かせると思いました。現実的に、ただ服をつくって売れるかどうかということ

じゃなくて、人に夢を与える仕事をしたいと強く思いました。その時、31歳で、津森千里さんのところに受かったのです。そこで段々クレプリというラインを任せられました。その後、またチャンスが来てブランドをスタートさせる話を頂きました。

デザイナーの仕事は作品ではなくて、ビジネスなので、とにかく売って、頑張ろうと決めました。いろんなことがうまくいって、サルエル、ジャガーというヒット商品ができました。

夢をずっとつくっていききたいということで、新たに「メルシーボークー、」というブランドを立ち上げさせていただき、今はそれに専念しています。

ふりかえって考えると、私がものを作る時は、いつもいろんな規制があります。先日、安藤忠雄さんが建築されたスペースで、ディスプレイをしました。いい機会なので学生さんたちに縫製を頼みました。女子美に声をかけなくてごめんなさい!撮影は、雑誌「流行通信」の取材でロンドンに行った時に、一緒に仕事をした日本人のカメラマン、ヘアメークの方々をお願いしました。本当に大変でしたが、規制の枠の中でできることを探すのがおもしろいと思います。洋服も、かたちに規制があるから、いろいろ切り替えていくことで、そこから新しいことを見つけるのも楽しいのです。

学生時代は自分の好きなものだけで良かったですね。今も好きなものを作っていますけれど、仕事の経験を通して、好きなものという感覚とは少し違います。こうであった方が、みんなが喜ぶのではないかなと、みんなの顔とかを思い浮かべているのです。そういう考え方がメインになってきています。今のみなさんにそういうことを望むのは、もちろん無理なことで、学生時代から、いろんなことをして、いろんな経験でわかることなのかなと思います。

これが売れた、という時、すべてデザイ



mercibeaucoup, 2008 S/S collection

ンだけの問題じゃないのです。デザイナーと営業と、パタンナーと生産と広報とお店まで、すべてがうまく構築されたときにできることなのです。売れるってことは奇跡だと思えます。すべてのことがかみあった時、みんなのパワーが同じ方向を向いた時、うまくいくのです。私の仕事は、みんなの気持ちをひとつにまとめなきゃいけないし、ひとつにしないと同じ風に動けない。本当にひとりではできない仕事じゃなくて、みんなとやっていく仕事だと思っています。

■宇津木さんとQ&A

講演の後、みんなで宇津木さんの近くに集まって、質問の時間をもちました。元気いっぱいのお話、学生たちはキラキラした目で聞き入っていました。宇津木さんも、みんなからパワーをもらえたと、喜んでくださいました。



盛況のためイスが足りず、床に座って聴講する学生の姿も

Q1 宇津木さんにとって、コミュニケーションとは？

すごく大事なものです。コミュニケーションをとれないと、みんなでひとつの方向を向けられないと思います。

Q2 壁にぶちあたったことはありますか？

今、人からなんでそんなにポジティブなのかと言われるけど、5年くらい超ネガティブな時代があって、世の中ハスに見ていました。そうすると、どんどん悪くなって、くさっていく。よどんでいく。私にとっては、子どもが天使でした。子どもが生まれて、そこから自分が変えられました。今のほうがいい。あの暗い5年があったから、あれはダメだったと切り替えられる。ある意味、とことん落ちたから今の自分があるのだと思います。今辛くても、何かきっかけがあります。ネガティブな時代もやればいい、そして、上がればいいと思う。無駄なことは絶対ないと私は思っています。今でもいろいろあるけど、「大丈夫!」と思っています。なんとかなる!自分の願望と違う結果になっても、結構そっちの方

が良かったりすることもあるのですよ。

Q3 自分を切り替える、きっかけはどうやって見つけるのでしょうか？

自分で気づくことができるように、いつも敏感であることです。自分の考え方とか気持ちが変わった時はチャンスですね。自分の考え方がぐるっと変わるその時って、わかるのです。でも、それは私自身がとことんやったからだと思います。中途半端ではダメだと思うし、頭の中だけで解決するよりも、実行したほうがいい。ぶつかるのは怖いけど、ダメであれば、また次の自分に行けるのです。

Q4 デザイナーにとって一番大切なものは？

一番はむずかしいけど、デザイン力。あと、いろんな部分での柔軟性、展開性みたいなもの。チームをつくること。

Q5 30年後の自分は

定年でしょう(笑)。感覚鈍ってると思うからデザインはやってないと思います。理想は、自分が子育てを少ししかできなかったから、孫の面倒をみたいですね。

Q6 好きな人はどんな人？

ポジティブな人で、素直な人。

Q7 自分のイメージや雰囲気や人に伝えることで、むずかしいと感じることはありますか？

自分で必死に人に伝えようとしているかどうか、だと思えます。必死に伝えようと、必ず伝わります。外国人との仕事でもそうです。言葉だけでなく、気持ちが大切です。

Q8 朝食は何を食べましたか？

パンと果物とコーヒー。プロテイン。本当に身体が資本です。身体を悪くすると何もできないから、みんなちゃんと食べなきゃダメですよ!

Q9 遊ぶとはどういうこと？

楽しいこと、楽しめることはすべて私にとっては遊びです。「メルシーボーケー、」も私にとっては、仕事であると同時に遊びでもあるのです。

Q10 「メルシーボーケー、」やっていて、どんな時にハッピーですか？

みんなが喜んでくれる時が、一番うれしいですね。ショーもみんなで楽しめるからこそ、ハッピーになれるのです。やはり、私にとって一番大切なことは、人と喜びをわかち合うことです。

Q11 生まれ変わったら何になりたいですか？

ダンサー。

Q12 今日のファッションポイントを教えてください。

靴はマカロンみたいなきのこがついてます。わが家の犬のラッキーが気になってかじられそう!きのこのジャガード織のパンツ。シルク Cotton のカーディガン。私は、デザインする時、素材からはじめていきます。素材から決めて、質感と形にしたいイメージをつくります。おち感とか。そういう所から考える。そういう意味で、テキスタイルデザイナーという仕事は、風合いなど、すごくおもしろい部分があると思います。日本は、カットソーには素材がいろいろありますが、布帛やニットの方は、まだ若い人が入ってきていないですね。若い人が織機の現場で求められています。おじさんが多いのですが、若い人の感性があると、いろいろな提案を出して、デザイナーとコラボレーションができるはずなんです。

Q13 結婚って、何だと思えますか？

わからないで結婚したので、うまくいかなかったのですが…。今は、いろんなことを一緒に乗り越えていくパートナーなのではないかと思っています。1人で乗り越えるのか、家族と乗り越えていくのか、それをどう選択していくかということですね。

Q14 最近嬉しかったこと

最近、「なんでそんなにポジティブでいられるのですか?」と言われて、あーよかった。ポジティブでいるんだな。と再確認できて嬉しかったですね。

Q15 専門学校と女子美の違いは？

専門学校は忙しかったですね。女子美では生地についてのいろいろなことが勉強できました。実際にプリントとかシルクスクリーンの技法をできたことが、今とても活かされています。とにかく、学生時代は無駄だとか思わないで、すべてに一生懸命やった方がいいと思います。頑固もいいけど、素直も大切。いいかなと思ったら、認めることが大切です。

Q16 毎日楽しく過ごす秘訣。

ちょっとした心の持ちようで自分を変えられると思います。そうすると毎日小さいことでも楽しめる。探せばある。大変なものこそ、楽しかったりする。大変だったからこそ、それをクリアできる喜びや感動があります。

Q17 '07-'08A/Wのテーマ「きのこ」とか、テーマはどういうところから持ってくるのですか？

何かの雑誌を見た時、きのこの特集をしていたのです。ちょうど秋冬だったのでぴったりだなと思いました。2008 S/Sのテーマの「星」はコンパースをはいてた子が電車の前にいたのです。場所とテーマ

をつなげて考えることにしています。星のときは、クエートのバイヤーの人が来て興味を持って、ガイドブックで調べたら、ドバイが面白そうだったので、決めました。きっかけはふとしたことですが、テーマとメッセージ性を探しながらやっています。



当日、宇津木さんはきのこモチーフの靴でした

Q18 服を作るとき、テーマやコンセプトは大事ですか？

私は、何かを伝えるために、あった方がいいと思うけれど、逆の意味でテーマなし、というもありだと思います。いろんな人がいていいと思います。きのこは菌なので、つながりという意味で、人とつながりなので。みんなつながっているということ传达了かったです。



全身メルシーボーケー、の洋服で決めてきてくれたメディアアート学科3年の北条あずささん。宇津木さんの洋服の魅力は？
「『メルシーボーケー、』は、デザインがかわいし、着た時のシルエットが、一見普通なんだけど、ちょっと違うのです。なんといっても着心地が驚くほどいいですね。今日の服は新宿のミロードで買いました。きのこのモチーフが好きなので、思い切って買っちゃいました」

Q19 息子さんは、宇津木さんのお仕事をどんな風に思っているのでしょうか？

今小学校5年生になって、だんだんわかるようになってきたみたいです。普段何も言いませんが、一応嬉しいみたいです。今まで、まったく職場に連れて行かなかったのですが、今年の夏休みに初めて現場に来ました。コレクション前でとても忙しくて、土日仕事をしていたので、一緒に来る？って、試しに聞いてみたらついてきたのです。みんなが、軽かまってくれて、本人は楽しかったようです。あと機械のCADとか見て驚いてました。それで、夏休みの社会科の宿題のテーマを「ママのお仕事」にして、8月30日のコレクションに向けての準備を調べたのです。4回くらい来て写真を撮ったりしました。みんなが仕事をしている現場に来て、結構まじめにしました。朝4時起きで撮影を見学させてもらったりとか、夜遅くなるとすみこで段ボールを敷いて寝て、私の仕事が終わるまで待ってました。その日の夜とか、いつもになく、やさしくしてくれました。やっぱり大変なんだな、と思ったみたいです。全部終わって、コレクションも見ることができました。感想を何て書いたか見たら、「仕事って大変なんだなということがよくわかりました。ママがいつも朝起きれないのが、よくわかった！」と書いてありました。わかってくれて良かったです（笑）。

Q20 就職試験のためのアドバイスをお願いします。

ブランドにこだわりすぎている人がいて、就職できるまで3~4年バイトをしている人がいますが、もったいないと思います。年齢だけあがって就職経験がない人は、なかなか雇えないですね。ポイントとしては人ですね。我々のチームに合うか合わないか。我々の話を聞いて、やってくれる人なのか、ということのみます。やはりひとつの同じ方向を向かなくちゃいけないから、一緒の方向に向ける子なのか、ということですね。面接の時に、企画やパタンナーの仕事なのにスーツを着てこられると、どんなものが好きかわからない、ということを感じます。履歴書でも、スーツだとどんなタイプかわからないですね。まったく違うテイストの人を入れても困るし、でも営業職だと、一概にそうは言えないですね。

Q21 お店づくりのお考えをお聞かせください。

まず、テーマを決めて、イメージをつけて、自分がお店に行ったらどうか、ということを考えます。デザイナーと相談しながら



mercibeaucoop, 青山店

ら、希望を出して決めています。お客さんが入りやすいか楽しいかどうか、など。

Q22 常に季節を先取りしてデザインをされますが、どのように？

今、ちょうど来年の秋冬のことを考え始めています。かたちを出すには、まず生地ですね。アパレルの人と生地屋さんが話し合っつくりあげるのですが、その時に、感覚のわかる若い人がいるともっと良くなると思っています。

Q23 「メルシーボーケー、」は店員の方の印象もいいですが、どんなお考えがありますか？

自分が買い物をする時に、おしつけがましいのは嫌だなと思います。タクシーに乗っても、愛想が悪いと、こっちの気持ちも下がってしまう。でも、そこで気持ちよく「はいっ！」って言うだけで、元気になる。みんなが、ちょこっとしたところで、気持ち良くしていけば、世の中がすごく明るくなると思っています。自分もそうだし、ショップを通して、そういうことを伝えていきたいと思っています。

Q24 最後に学生たちへのメッセージをお願いします。

みんな、明るく、楽しく元気ががんばってください。あと、車の免許はとっておくこと（笑）！



表紙のイラストはmercibeaucoop, 2008 S/S collectionのキャラクターを務める「ぜい肉マン」

プロフィール 宇津木 えり

1966年東京に生まれる。1986年 女子美術短期大学 造形科衣服デザイン教室卒業後、エスモード・ジャパン東京校入学。1学年修了後、渡仏。パリの 스튜디오オベルソーで1年間学ぶ。帰国後、いくつかの企業で経験を積み、2001年に自身のブランドを立ち上げる。2005年に離れ、同年の9月に㈱エイ・ネットに入社。翌年の3月に新しい自身のブランド「メルシーボーケー、」で東京コレクションでデビュー。その後毎シーズンJFWに参加。現在に至る。

Festival ● 女子美祭2007

10月26日～28日の3日間、杉並・相模原キャンパスで女子美祭が開催されました。今年の相模原キャンパスのテーマは「美EAT」、杉並キャンパスのテーマは「宴」です。

相模原キャンパスのゲストは、本学杉並キャンパスがロケ地となって撮影された映画「人のセックスを笑うな」の監督の井口奈己さん、「アンパンマン」の作者のやなせ

たかしさん、アートディレクターの水野学さん、杉並キャンパスのゲストは絵本作家の工藤ノリコさんでした。期間中雨に見舞われる場面もありましたが連日大盛況で終えることができました。

※学生による水野学さんへのインタビューを本学ウェブサイトに掲載中。

<http://www.joshibi.ac.jp/event/bisai/guest2007.html>

杉並キャンパス



Festival

JOSHIBA UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

相模原キャンパス



Report ● ① 絵本作家 工藤ノリコさんの女子美祭 記念講演



「センシュちゃんとうオットちゃん」より ©工藤ノリコ/小学館

女子美祭杉並キャンパスの記念講演として、短期大学造形科グラフィックデザイン教室（現短期大学部造形学科デザインコース）の卒業生で絵本作家・漫画家の工藤ノリコさんと、彼女の作品『マルガリータとかいぞく船』を編集したあかね書房の木内麻紀子さんに対談をお願いしました。講演のはじめには、工藤さんの作品『センシュちゃんとうオットちゃんのクリスマス』を学生による朗読で上映しました。終始なごやかな雰囲気は、まさに工藤さんの絵本の世界。

夢を実現した先輩のお話に参加者は多くの刺激を受けました。

とにかく観ることが好きだった学生時代

木内 工藤さんは、どんな学生さんだったのですか？

工藤 子どものときから絵を描くことが好きでした。絵を描かない暮らしというのは考えられなかったです。女子美のデザイン科を受験する時、私は予備校に通わずいつも1人で描いていたので、4年制の大学の入試日には、集団で描いている実技の雰囲気にもまれて失敗しました。そこで、その翌週の短大の受験日には耳栓をして挑んだら、集中することができて、無事合格できました。

木内 ものごとに慎重な、工藤さんの性格を表しているエピソードですね。

工藤 私はどうしても美術の世界で生きていきたいと思っていましたが、女子美に入ると、テクニックもあって絵がうまい人がいっぱいいて、自信をなくしたりしていました。

木内 デザイン科を専攻した理由は？

工藤 とにかく職業にしたかったからです。一生美術にかかわりたいと思っていました。私は1988年入学で、デザインの現場にまだコンピュータがない時代。ガラス棒と面相筆を使って文字を描いていました。技術職ですね。

木内 学生生活はいかがでしたか？

工藤 学生割引で映画や展覧会をいっぱい観ました。とにかく観ることが好きでした。映画では、ジム・ジャームッシュ、ジョン・ウォーターズ、アレックス・コックス監督作品や、『ロッキー・ホラー・ショー』など…。当時好きだったものは今もだいたい変わってませんね。また、新宿のシェーキーズでアルバイトをしていました。グループ展などもせず、いつも夢をみているような浮かれた学生だったように思います。浪人を経験した友人たちは、予備校でいろんなことを吸収していて、それを教えてくれたので刺激的でした。学生時代に学んだタティングは、苦手でしたが、マンガのデザインや表紙を制作する時にとても役に立っています。大学時代は執行猶予期間。やりたいことをやるといいます。

木内 学生時代にインスピレーション受けたものは？

工藤 やはり映画が一番かな。展覧会では、ルネ・マグリット展がとても印象深く記憶に残っています。当時のチケットは、コンピュータではなく人間の手でデザインされたものですが、今も大切にしておいています。基本的に写實的に描いてあるものが好きなのですが、マグリットは完璧に描いてあるけれど、それだけではないところに惹かれます。月夜の夜みたいな世界というか…。

木内 卒業する頃はどんなことを考えていましたか？

工藤 2年生の時は現代美術のコースを選択しました。楠本先生や、装丁の原田先生

など、すばらしい先生方がいらして、エネルギーに現代美術の思考方法を学生に熱く語ってくれて、それがとても嬉しかったです。

卒業後は美術の世界で仕事をしたいと思ったけれど、どうしたらいいのかわからなかった。当時は売り手市場でしたが、自分はグラフィックデザイナーになるのは技術的に無理そうだと思っていました。そんなときに学校の掲示板で東京ディズニーランドの装飾部門の求人票を見つけ、入社試験を受けて無事就職できたのです。ディズニーランドが大好きでしたので、日々の作業が本当に楽しい職場でしたが、約2年半働いた後、自己表現をしたいというのを思って、フリーのイラストレーターになりました。

一周廻って、一番好きなことに辿り着いた

木内 独立後は大変でしたか？

工藤 当時はバブル時代で、最初は紹介で結構仕事がありました。しかしながら、やる気だけはあるけれどまだまだ絵がそんなに上手くなかったの、バブル崩壊後にはあつという間に仕事なくなった。そこから、初めて作品を持って売り込みに回りました。24～5歳の頃で、どこからも仕事がないのが2年間。すると夫が「それなら、一番やってみたいことに挑戦してみたほうがいい」と言ってくれたのです。

絵本を仕事にしようとは、恐れ多いというか、夢にも思っていなかったのですが、この夫の言葉が転機になりました。小学館

発刊の「おひさま」という絵本雑誌があった、そのコンクールに作品を応募したら入選し、それがきっかけでトムズボックスの土井さんをご紹介いただきました。これが、初の絵本『コバンツアーかぶしきがいしゃ』の出版につながりました。1999年、27歳の時です。

どうにも道がなくなって行き詰まってしまったその先に、ドアがあったという感じですか。子どもの頃からずっと、絵本や物語が好きでした。そんな一番好きなことを職業にするのはたぶん無理だろうと漠然と思っていたのですが、何かしらやっているうちに、一周廻ってそこに辿り着いたという感じです。自信はないけどやる気はありましたね。絵本を目指そうと思ったら、これに賭けるしかない、となって、すごく頑張ることができました。

木内 絵本作家になるためにはどんな素質が必要だと思いますか？

工藤 私の場合は、小学生の時からお話をつくるのが好きでした。『マルガリータとかいぞく船』もそうですが、文章を書くのも好きなので、今後はもう少し長めの物語の制作にも挑戦してみたいと思っています。アイデアがどんどん出てくるので…。

絵本はこうあるべきということにとらわれなくていいと思います。『絵本作家になりたい』というのではなく、『絵本に描きたいことがあるから描く』という衝動で突き進めば必ず道は開けると思います。

トムズボックスの土井さんもおっしゃっておられますが、とにかく最初のページから最後のページまで通して描いて完成させてみるのが大事です。未完のものは良く思ってしまうから、そのままにしておかないで無理にでも一度完成させてみると、弱点や難点が見えてきます。そこからそれを修正していくように作業を重ねれば、とて

も上達すると思います。技術や知識は、あってもいいけれど、なくてもまったく構わないと思います。一番必要なことは、絵本をつくりたいという衝動です。自分は何が好きか、ということをお大切にすると良いと思います。編集者としては、どのようにお考えですか？

木内 私の作家さんに対しての姿勢には、「人として好きなところがあるなら、一緒に仕事がしたい」という信条があります。本人がいなくても作品を拝見して、その方に興味を持てるかどうかが重要です。作品の中のメッセージが、その方にとって本物かどうか、ということが気になるのです。その場合は、私と同じ考えじゃなくてもいい。主義主張やものの見方がよく伝わってくるのが大切です。自分の思いをかたちにできる力があるか、ということなのでしょうね。もちろん、編集者と作家のマッチングというもありますよ。

工藤 見てくださる編集者の方の99人からダメと言われても、1人わかってくれる人に出会えば良いと思います。おひさま編集部は、私がまだ技術的に未熟な時期からずっと載せて、育てていただきました。このように皆様にお世話になりながら続けていると、だんだんかたちになっていくのだと思います。

木内 私も持ち込みの人と会う時は、まず、10作仕上げてみるようにと言います。そ

れができる人というのは半分くらいになるのですが、10作中の3作くらいは人に見せられるものになるようです。特に若い方には、厳しく言いますね。世の中には他の仕事もいっぱいあるのです。自分に問うためにも、アマチュアの方ほどリスクを背負って描かなければならないと思います。それをしっかりやった人の、その3作にはアドバイスすることができますね。私とは仕事をご一緒できなくても、ほかの編集者を紹介するなど、出合いやつながりが生まれるのです。

工藤 出会うべき人とは必ず出会える信じて、その出合いを自分で呼び込めるようになるよと思います。

インスピレーションは自然のものだから無限

木内 工藤さんも私も、絵本という世界に来られて本当によかったですね。工藤さんが気をつけていることはどんなことですか？

工藤 これが職業にできて、本当にありがたいと思っています。私の場合の作業のアプローチとしては、進めながら構築していくようなやり方が好きです。最初の段階からいろいろ決めて固めてしまうと、自分のイメージに拘束されてしまうので、大雑把なラフにしておかないと、それを越えられなくなってしまいます。また、私の場合、頭の中だけで考えて作ると理屈っぽくなってしまって面白くないので、インスピレーションで感じることを表現するようにしています。インスピレーションは自然のものだから無限です。

木内 作りながら感じていることがあったらお聞かせください。

工藤 読んでくれる人を喜ばせたいというか、共有したいという思いが強いです。自



コバンツアーかぶしきがいしゃ ©工藤ノリコ/偕成社



マルガリータとかいぞく船 ©工藤ノリコ/あかね書房



ピヨピヨスーパーマーケット ©工藤ノリコ/偕成出版社

分の内面でキャッチする世界のイメージを、自分自身もこの目で見てみたいと思っています、それに救われたい、という願いもあります。描き手でありながら、私もまた読み手なのだと思います。

木内 実は、美大を出て編集者になっている人というのも多いのです。私自身は学生時代演劇をやりながら、写真の短大に行きました。演劇で何を学んだかといえば、裏方に燃える自分を知ったのです。裏方の仕事は編集の仕事に似ています。表現に携わるという意味では、やりがいもあり、作家さんの作品を一番初めにらせていただくことの喜びと特権がある仕事です。ところで工藤さんは、本の善し悪しは編集者によると思いますか？

工藤 そうは思いません。何をもちて善しとするか、それぞれの主観の問題だと思う

ので。

木内 最後に、絵本作家とはどういうお仕事ですか？

工藤 私は、自分の内面で感じる世界、今ある現実とは別に存在している世界を、この私たちの生きている現実世界においても、この目で見ていたいと思っています。私は、お伽噺の世界の方が、この現実世界よりもリアルで真実の世界だと感じて日々生きています。死ぬことは怖くないけど、死ぬまでこの世で生きていくことの方が私にとっては恐怖です。私と同じように感じながらがんばってこの世を生きている子どもたちに、私の感じる別の世界のことを、言うなれば「旅行記」または「リポート」として「絵本」というかたちにして見てもらえたら、と思って制作しています。



工藤 ノリコ

1970年生まれ。1990年女子美術短期大学造形科グラフィックデザイン教室卒。絵本作家、漫画家。絵本に『センシユちゃんとうオットちゃん』『ピヨピヨスーパーマーケット』『ピヨピヨメリークリスマス』『セミくんいよいよこんやです』『寿限無』『こんやはどんなゆめをみる？』『フローリアとおじさん』『ペンギンきょうだいれっしやのたび』他。読み物に『マルガリータとかいぞく船』マンガに『がんばれ！ワンワンちゃん』シリーズがある。

木内 麻紀子

1971年生まれ。児童図書専門出版社である、あかね書房の編集者。

Report ● 2 インテリятトレンドショー 第26回JAPANTEX2007 「クリエイターズタウン」に出展

2007年11月21日～24日東京ビッグサイトにてインテリア業界を代表する企業が世界から集う国際産業見本市JAPANTEXが開催されました。この中で行われる恒例のイベント「クリエイターズタウン」は国内外の30校でテキスタイルを専攻する学生たちが、企業や団体から提供された3つの素材＜糸・布・和紙＞から、平面、立体、半立体の作品を制作してプレゼンテーションするものです。本学からは芸術学部工芸学科、短期大学部専攻科造形専攻工芸デザインコースが参加しました。今年のテーマは『触覚の化現』です。

21日には学生による作品プレゼンテーションがおこなわれました。

【芸術学部工芸学科】

「暖々」

コンセプト：
和紙特有の暖かみのある質感は興味深い。さらに細く裂いて織り込んだ時に現れる、独特な陰影と厚みは、糸による織物とは異なる柔らかな表現を生み出す。

このテクスチャーを使って、凍えた体に太陽の光があたり、じんわりと暖かさがしみこんでいく感覚を表現した。



【短期大学部専攻科造形専攻工芸デザインコース】

「進化」

コンセプト：
人間が感じてきた様々な触覚があるが、細胞の一つ一つが沸き上がり、さらに求めることにより、これまで感じ得なかった触覚がおこる様を進化とし、その進化の過程を表現した。



Report ● 3 横浜市民ギャラリー 女子美術大学学生作品展—女子美美術館収蔵作品賞受賞作品を中心に—

2007年12月3日～8日、横浜市民ギャラリーにて展覧会「女子美術大学学生作品展—女子美美術館収蔵作品賞受賞作品を中心に—」が開催されました。

この展覧会では、平成18年度女子美美術館収蔵作品賞を受賞した卒業制作作品全てと、平成15～17年度の同賞受賞作品から選出した作品の計33点が展示されました。学外の施設で、同賞受賞作品がまとめて展示されたのは、今回が初めてです。

作品は平面、立体、映像とさまざまな分野におよびます。「卒業制作・修了制作」という目的を達成したそれらの作品はどれ

も、在学中のすべての試行、習得した技術を注ぎこみ、作品のすみずみまで行き渡らせた作家の結晶ともいえる力作で、見ごたえのある展覧会となりました。今、美術に携わっている人たちにはもちろん、これから美術にかかわりたいと思っている人たちにも、若き女性アーティストの活動、「女子美のアート」をアピールする良い機会となりました。

女子美美術館収蔵作品賞

優秀な修了・卒業作品制作者を顕彰することを目的としており、受賞作は女子美術大学美術館へ収蔵される。



Lecture ● 2 デザイン学科 客員教授 仲條正義 先生 特別授業

2007年10月20日、1011教室にて、仲條正義先生の特別授業がおこなわれました。参加者はデザイン学科の学生50名程です。参加希望の学生にはあらかじめ課題が出されており、その完成作品を仲條先生が中心になり同学科准教授の林規章先生、浅野晃成先生らが一点ずつ講評するものでした。

課題内容に関して仲條先生は「普段見かけるもので皆が興味を持ってつくりやすいもの。また、個性が出しやすいもの。」ということで『旅行会社のパンフレット制作』をテーマにしました。コンピュータ、写真だけでなく自分の手を動かして制作して完成させるというのが狙いとのことで、「未完成でも企画が面白い、ベースがよい、見たことがない、こんなのがあったら、みんながおもしろいと思えるようなものが出てきたらいいですね。」と語っておられました。制作の条件としては、パンフレットでのコミュニケーションにおいてタイポグラフィを重要な要素とし、ロゴ等を制作・使用すること、設定した旅行内容のイメージを伝える自作のイラストレーションを使用することなどが与えられました。

また、講評会の総評では手作業とコン



講評会は仲條先生・浅野先生・林先生(左より)が参加し、皆でそれぞれの意見を出しながら丁寧に進みました。

ピュータ作業のメリット、デメリットについて語られました。「コンピュータのみで制作したものは、初めの段階から完成形がイメージとさほど違いはなく、きちんとできあがってしまいます。あまり構想がなくても仕上がってしまうため、ひと味たりない味気ないものになってしまうこともあります。例えば、英文の書体ローマン体・ゴシック体にしても文字をコンピュータ化するにあたり簡略化されたものになってしまいました。そういう点では昔のものの方がひとつひとつの文字が上質だったと思います。しかし、だんだん慣れてくると一味足りないような文字もそれはそれでよく見えてきて、それなりのレベルのものとして使用できます。今の軽い文字でも慣れてくればだんだん面白いものが出てくるものです。技術の開発で世の中に従って変化していくことは大切です。時代の移り変わりによって新鮮な新しさや発見もあるから、どちらがよいともいいきれないのです。」

最後に優秀な作品10名の作者には仲條先生より、オリジナルカレンダー(サイン入り)が賞品として渡されました。優秀な作品が多かったため10点選ぶのは苦労されたようです。



個別の講評に学生も緊張気味



サインをする仲條先生



仲條賞を1番に買ったデザイン学科3年生平松悠里さん。「工場ツアー」を企画しました。平松さん、おめでとう!



仲條先生のコメント:工場を旅する、ということが新しい発想である。デザインも良い。作者のコメント:すごく楽しく作れた。ページを「めくる」ではなく「増やす」という動作で工場のイメージを伝えなかった。角度で各ページのかたちがかわるというものの、イラストも手描きで描いた。

Lecture ● 3 ドキュメンタリー映画 「Helvetica (ヘルベチカ)」 上映

2007年12月19日、世界で一番有名な書体、ヘルベチカのドキュメンタリー映画の映写会を相模原キャンパスで開催しました。ヘルベチカはその使いやすさと存在感で今でも世界中の数多くのデザイナーに支持されている欧文書体です。本学ではヘルベチカの金属活字や活版印刷の道具類を所有しており、デザイン棟4号館には学生が使用できる活字工房があります。映写会では上映前に、本学大学院 美術研究科 森啓客員教授よりヘルベチカについての解説があり、上映後は「日本でこのようなフィルムを作るなら、どのような書体について

どんなふうに伝えるか。これがみなさんに与えられた課題です。」と期待を込めた言葉で締めくくられました。今年春頃にはこのドキュメンタリー映画の上映を伴った一般の方も参加いただけるタイポグラフィのイベントを杉並キャンパスで開催予定です。また、今年半ばに(株)ブチグラフィックがこの映画のDVDを発売する予定です。

『Helvetica A Documentary Film by Gary Hustwit』
監督: ゲーリー・ハストウィット
2007年イギリス制作 / カラー / 80min / ビスタサイズ
主な出演者: エリック・シュピーカーマン 他

提供: アスミック・エース エンターテインメント株式会社
プロデュース: 株式会社ブチグラフィック



学内映写会用ポスター© 欧文活字研究会/女子美術大学

Topics ● 1

サマースクール報告 英国流 美術指導・デザイン指導に触れる

本学の学術交流協定大学である英国バーミンガム・アート・デザイン学院（以下BIAD）で、2007年8月4日から9月3日までの4週間にわたって海外サマー・スクールが実施されました。

このスクールは、本学とBIADが共同で企画した美術・デザインの実技授業を中心に構成されており、今年が4回目となります。今回は、22名（芸術学部18名、短期大学部4名）の学生が参加しました。出発までに英国の生活情報に関するオリエンテーションや事前指導、英国人講師による英語研修を約2ヶ月にわたって受講し、スクール参加に備えました。

主なプログラム

【第1週】グループ交流・紹介プロジェクト + 服制作プロジェクト

グループ交流・紹介プロジェクトでは、まず、予め準備された様々な素材を使って“自分”を表現する筆を作ります。そして教室の壁一面に貼られた真っ白い紙の上に、各々の筆で自由に“自分”を描きました。

服制作プロジェクトでは、紙とワイヤー、ストッキング素材を使って“身に着けるもの”を作りました。コサージュやアクセサリから大胆なドレスまで、個性豊かな作品が完成し、最後にファッションショーで披露されました。



ファッションショー

【第2週】ロンドン・リバプール融合プロジェクト

ロンドン、リバプールへの文化小旅行をもとに、この2都市の比較をテーマにコラージュの制作です。

収集したチラシ類や美術館のチケット、切り抜きなどを有効に使い、素材も形態も様々な作品が仕上がりました。英語でのプレゼンテーションでは、苦戦しながらも作品のコンセプトなどを自分の言葉で発表し、講師からは一人一人に対してコメントが贈られました。



【第3週】素材実験 + ビデオブースプロジェクト

普段は自専攻の専門分野に取り組む学生にとって、素材実験は自専攻以外で使われる素材や技法を経験し、その特性を修得できる絶好の機会です。金属、木、石膏、テキスタイル（布・糸）、版画での表現を試みました。

ビデオブースプロジェクトは、一人一人が自由にテーマを決めて1分間の映像作品を作る課題です。アニメーション、コンセプトチュアル、実写などなど、収録後の編集を経て、とても个性的で完成度の高い22作品が出来上がりました。

【第4週】修了制作

これまでの英国生活体験や素材・技法をヒントに、スクールの総まとめとなる修了作品に取り組みました。

授業最終日、力のかもった作品がギャラリーに展示されました。その後、第1週目のファッションショーの映像とビデオブースプロジェクトの作品を全員で鑑賞し、BIAD学科長代理より修了証書が一人一人に手渡されました。

<学生から>

絵画学科洋画専攻4年 的場 あゆみさん

2007年夏、私は1ヶ月間イギリスのバーミンガムでサマースクールに参加してきました。見知らぬ土地でいるいろいろな人や場所をみて視野を広げ、何か自分の作品にヒントになるものがあるか見つけたかったからです。

イギリスは想像していたよりも物価が高く、自炊生活だったので考えて買い物をして料理をしていました。それにつけて学校の課題も多く、一週間で一つの課題を終わらせるなど、超過密スケジュールでした。

一番印象的であった課題はロンドンとリバプールの違いをコラージュで表現するもので、私はコラージュブックとしてそれぞれ本を作りました。しかし講評するときは勿論英語だったので言語の違いによる意思疎通の難しさを痛感しました。

すごく忙しかったけれど、とても充実した夏を過ごせたと思います。卒業制作では自分なりにイギリスで吸収したものを表現するつもりです。

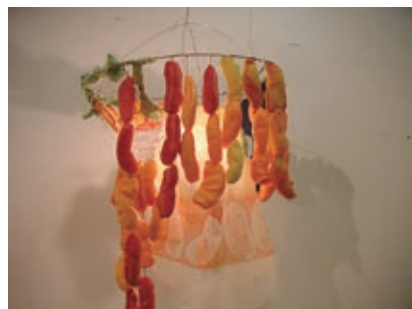
デザイン学科1年 牧野 理慧さん

まるで異世界のようなだった。違う言語、違う人種、そして違う考え方。絵を1枚見た時の先生のコメント1つをとっても「ああそう考えるのか」と驚きの連続だった。

またサマースクールでは、BIADでの絵の勉強だけではなくイギリスでの生活も体験する事になる。異国の空気を1日1日生活しながら肌で感じ取るとは、自分自身にも実となる経験であった。

私の狭かった見解は、この夏でワッと広がったように思う。女子美内で学べるものもたくさんあるが、日本から一歩外に出てみるだけで視野は果てしなく広がった。

この体験は、自分の将来を見つめ直すいいきっかけになったと思う。



修了制作

Close up ● ① クローズアップ① もう一度キャンパスへ —大学院修了生 建部 ひろ子さん—

建部ひろ子さんは05年に芸術学部絵画学科洋画専攻を、07年に大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画領域を修了された。同年に第43回神奈川県美術展にてはまぎん財団賞を受賞する。64歳である。今もなお、創作に向かうのはなぜだろうか。

きっかけはアートセミナー

「私は18歳のときに女子美術短期大学絵画教室で2年間学んでいました。卒業後は出版社に勤め小学雑誌の編集に携わり、退社してからは彫金の作品を創っていました。36歳から現在も子どもたちの絵画教室を主宰しています。ただ、短大卒業後から私は絵を描いていませんでした。そのことで、やらねばならないことをやっていないという焦燥感を持っていました。そんな時、たまたま女子美のアートセミナーを受講する機会があり、その数日間は胸のときめくような思いを感じました。同時に、10代後半から20代前半の感性が鋭い時期に制作の楽しさや苦しさを味わった人は、それを続けていかないとどうしようもなく飢えているような気持ちになることに気がついて反省しました。先生も一生懸命で、午前中から工房をあけてくださったり。やる気がある人には寛大でいてくれる。そういう雰囲気は昔の女子美を思い出しました。また勉強し直したいと強く思ったのはこの時でした。」

先生方のアドバイスもありその年の秋に社会人入試を受けることになる。受験にあたっては「自分のデッサンの未熟さを知っていましたので1年間はデッサン教室や予

備校に通ってから受けようと思っていました。」ところが研究室の先生からはともかく絵を描いて持ってくることでチャレンジしてみたかと勧められたという。「持っていくと絵画の先生が10人くらい集まって、目の前でさんざん酷評されて(笑)。その時は、ああ、もう駄目だと。でも、帰り際にもう一度絵を持ってくるように言われて。それで受験するまでに至りました。」

学部生から大学院生へ

見事、絵画学科洋画専攻に合格し晴れて大学生となったが、苦手意識のあるデッサンに悩まされた。「自分と周りを比較して茫然としました。特に1年次のときは、『これだけデッサンで描ける』というのを、皆が一生懸命に示したい時期です。苦労しました。先生方はそれでいいとしきりに励ましてくださいましたが、自分ではいいわけがないと、自分の自信にもなるデッサンは描けたほうがいいと感じていました。大学ではデッサンは基礎で、みんなができることを前提としているという現実が、こたえましたね。」

何を描くのがやっと見えてきたのは学部4年次の時だという。「それまでは本当にめっちゃくちゃで、ただひたすら描きつづきみたいなことをしていました。やめた方が楽だとも考えました。でもここでやめたらこれから先の自分をもっと許せなくなる。奥様のご趣味で始めたことではないぞと。やめるのなら前から気になっていた学校の裏のウォータータンクを描いてからにしようと思いました。でもそのモチーフがすごく面白くなって、描き続けたいと思い結局は大学院進学まで決意しました。若い人の行き場を狭めてしまうことを承知の上で、それでも勉強したいと思いました。ただ、卒業制作でのスタイルをずっと続けていく気持ちで大学院を受けたのに実際に進学してみるとなかなか納得できる作品が作れなくて。悩みに悩みました。大学院の後



半です、これなら納得いくものが描けるかな？という気配を感じたのは、それが修了制作でした。」

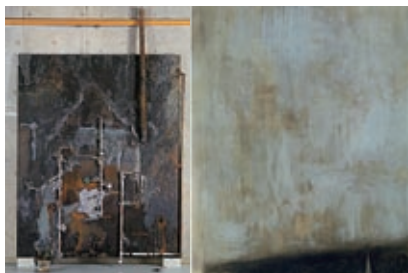
まわりの人々との関係は…

年の離れた同級生との学生生活は「楽しかった。いい友達ができて、いい6年間を過ごせました。ここに集まっている人たちは幸福だと思いましたよ。10代で自分のしたいことを見つけられて。いい若者を見たなと思います。物の考え方は、年代によって違うと思う。それをわかった上で、仲間として扱っていただけだと思います。修了制作、卒業制作は周りからいい影響を受けて頑張れました。先生方との関係もまた面白かった。年齢が同じぐらいの方たちとの関係も面白かったし、若い先生も面白かった。うっかりすると息子ぐらいの年(笑)。先生方には随分励ましていただき、遅い出発でもこれから制作を続けていけるという勇気をいただきました。」

大学進学に対する家族の反応は様々だ。「主人は一言『無駄』と。それで私は『何が無駄なんですか。お金ですか、時間ですか』と詰問したら『両方』って。そこから始まりました(笑)。子どもたちは独立していましたし、すごく賛成してくれました。母の介護などのいろんなことが終わったときでした。本当はもう10歳若くに勉強できたらよかったと思いますが、たまたまそのときしかなかった。主人も最初はそんなでしたが結局終始協力的でした。」



絵画教室は絵を「教える」のではなく子どもたちに創作するためのヒントや夢中になれるものを提供する場であらうとしている。毎年恒例の親御さんを迎えての焼き芋パーティーも子どもたちにとって「夢中になれる」時間だ。



左:卒業制作「WATER TANK」(ズームアップ) (油彩、石粘土、金網、水道部品・F150号) 右:修了制作「ここにある」(油彩、F150号)



大きなキャンパスは室内で制作できないので、庭で制作することもある。

大学生活は自分のための時間

ご自身にとって大学は、どのようなものだったのか最後に振り返ってもらった。「私にとっての大学での6年間とは家庭・仕事（絵画教室）・心地良い友人との付き合いなどの日常からキッパリ自分を切り離し、自分の勉強に没頭できた—これが大事だったと思います。若い人にはまだわからないと思いますが、自分のことだけにこ

れほど時間をかけられる時は今後ないのだと思います。大学の生活を大事に使ったら良いと本当に思います。そして私たちの年代になってからこういう勉強ができる機会がもてる時代になったというのは幸福なことでした。これからは気をつけて制作の時間をとらないと、また前のように戻ってしまう。制作活動も絵画教室も続けていきたいと思えますし、これからです。」

プロフィール：

本名 建部 碩子。1963年女子美術短期大学絵画教室卒。卒業後、出版社に入社、小学雑誌の編集に携わる。退社後は彫金作家としても活動。36歳より子どもたちのための絵画教室「あとろえ・たてべ」を主宰、現在も続けている。2005年女子美術大学芸術学部絵画学科洋画専攻卒、卒業制作で優秀作品賞受賞。2007年同大学大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画領域修了。同年、卒業制作から描き続けていたウォータータンクシリーズ「ここにある 07-7」が第43回神奈川県美術展にて「はまぎん財団賞」受賞。07年9月にギャラリー青羅にて「建部ひろ子展」を開催。

Topics ● ② 女子美スタイル☆最前線

JOSHIBI graduate works 2007

女子美術大学・女子美術大学短期大学部 卒業制作選抜学外展

昨年の代官山ヒルサイドテラスから東京都美術館に場所を移し、芸術学部・短大及び専攻科生の卒業・修了制作選抜作品による学外展「女子美スタイル☆最前線」が今年度も開催されます。昨年に引き続き、本展のキュレーションは杉田敦先生（美術評論家／芸術学部基礎教養系准教授）が務めます。なお、今年度は「JOSHIBI rainbow award」と題し表現者としての可能性を感じさせる、感性、才能、問題意識をもつ作品に7つの色を冠した7賞が与えられます。また、会期中にはギャラリートークやオープニング（昨年は短大卒業生で女優の賀来千香子さんにご出席いただきました）なども予定しておりますので、在学生の皆さんもぜひご参加ください。

会期：2008年2月13日(水)～2月17日(日)
9:00～17:00（入場16:30迄）
会場：東京都美術館
（東京都台東区上野公園8-36）
※ギャラリートーク及びオープニング等の情報は本学ウェブサイトでご確認ください。



NEWS ● ① 女子美ギャラリー ニケ OPEN

10月下旬、ギャラリースペース「女子美ギャラリー ニケ」（新中野駅徒歩1分）がオープンしました。すでに以下の展覧会を開催しました。

「女子美ギャラリー ニケオープン記念展 平成18年度女子美術館収蔵作品賞受賞作品より」
（10月26日～11月13日）

「平成19年度 女子美術大学・女子美術大学短期大学部 退職教員記念展」

（11月19日～12月15日）



NEWS ● ② 相模原キャンパス ICT棟（13号館）が建築コンクールで奨励賞受賞！

2007年3月に竣工した相模原キャンパスのICT棟（13号館）が、第52回神奈川建築コンクールの一般建築物部門で奨励賞を受賞しました。ICT棟の基本設計（デザイン）は、本学キャンパス整備室（室長：芸術学部デザイン学科飯村和道教授）がおこないました。同棟はコンピュータによる専門教育のための中心的施設として、デザイン学科、メディアアート学科、ファッショ

ン造形学科、芸術学科を中心に授業で利用しているほか、これらの学科以外でもコンピュータに関わるリテラシー教育や、美術・

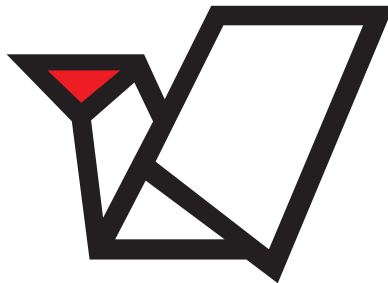
デザイン分野での専門的な授業などで利用しています。



NEWS ● ③ 神奈川県後期高齢者医療広域連合章(ロゴマーク) デザイン

神奈川県後期高齢者医療広域連合のロゴマークに、芸術学部デザイン学科VCDコース3年の山崎梨乃さんのデザインが採用されました。後期高齢者医療広域連合とは、2008年4月から始まる「後期高齢者医療」を運営する都道府県単位の特別地方公共団体で、各都道府県ごとに区域内の全市町村が加入して構成されます。2007年5月、神奈川県と同連合より本学へロゴマーク作成の依頼があり、関係市町村長・広域連合議員・市町村職員等によるアンケートに基づく選考の結果、山崎梨乃さんのデザインが採用されました。10月26日には鎌倉市役所庁議室にて感謝状授与と式

おこなわれました。このデザインは、長寿の象徴とされる「鶴」をモチーフにしたマークで、全体の形が同連合の頭文字である「K」に見えるようにデザインされています。



折り鶴のような形にすることで、高齢者の方だけでなく、様々な年代の方に親しみを感じてもらえるようなデザインとなっています。



左)神奈川県後期高齢者医療広域連合長(鎌倉市長)石渡徳一氏
中)芸術学部デザイン学科VCDコース3年 山崎梨乃さん
右)大学院美術研究科修士課程デザイン専攻(視覚造形)/芸術学部デザイン学科 長谷川好男教授

NEWS ● ④ 平成19年度 文部科学省「特色GP」に選定されました
問題解決型美術大学教育の実践 -アート & デザイン・ファシリテーターの育成-

平成19年度 文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」*に、本学の取組内容「問題解決型美術大学教育の実践-アート&デザイン・ファシリテーターの育成-」が選定されました。

本取組は、本学が杉並区等の地域社会と協創提携し、学生たちが杉並区全域をフィールドワークの場とし、地域の安全、教育、環境等の問題解決に取組む実践型教育プログラムです。

学生は今日的課題に取組む過程で、地域の人々と交流しながら問題解決策を創案・提起し、結果として地域に貢献するとともに

に自身の創造意欲や自己発見を促します。具体的には、成長期の子どもに優しさと思いやりを育む絵本・アニメや知育教材、発達に遅れのある子どもへの療育支援、地域のマップ作りなど、文化創造を促すアート・プロジェクトです。また、視覚表現にインタラクティブIT技術を組み合わせたコミュニケーション・システムの開発を行い、地域や子ども同士の豊かな交流を促します。誰もが公平に社会参画できるまちづくり、心の健全な成長や障害児療育支援、子育て支援等のネットワークを形成し、問題解決を実践するアート&デザイン・ファ

シリテーターとして活躍できる人材育成をおこないます。

また、本取組の一つである地域のマップ作りプロジェクトは、杉並区から青少年の模範となる行いであるとして表彰されました。平成19年度杉並区青少年表彰授賞式は11月24日に、勤労福祉会館で行われました。

*「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」は、大学教育の改善に資する種々の取組のうち、特色ある優れたものを選定し、選定された事例を広く社会に情報提供するとともに、財政支援をおこなうことにより、大学および教員のインセンティブを高めるとともに、各大学の教育改善の取組がその他の大学の参考になり、高等教育の活性化が促進されることを目的とするものです。

NEWS ● ⑤ 荳崎大村美術館が開館

本学の理事長である大村智氏が建設した「荳崎大村美術館」が2007年10月27日、山梨県荳崎市神山町鍋山に開館しました。

当日のオープニングセレモニーには、山梨県知事の横山正明氏、衆議院議員の小野次郎氏、荳崎市長の横山公明氏、女子美術大学佐野ぬい学長などのほか、北里研究所、女子美術大学の教職員など200名を超える方々がお祝いに参集しました。

この「荳崎大村美術館」は、JR中央本線荳崎駅から車で7分程度で、2,626㎡の敷地に二階建て建物(延べ床面積478㎡)が白山城址のある小山を背にして建てられています。(開館時間は水曜日を除く午前10時から午後6時で入場料は一般500円、小中学校生は200円)

一階の主展示室には、女流作家のみが展示されていて、なかでも女子美術大学出身の作家の作品が数多く並び、二階には、鈴木信太郎ら男性作家の作品も展示されています。二階のカフェからは、ハヶ岳、茅ヶ岳、富士山が眺望できますが、当日は雨のため「いっさら見えんじゃんけ」、「こっちが富士山すら」と地元の方々のつぶやきも聞きました。

大村理事長は、「すぐれた美術品は人類すべての共有財産。美術品を鑑賞する喜びを皆さんと分かち合いたい」、また、「人として大事なことは地元へ恩返しすること」と述べられました。



NEWS ● 6 Tokyo Designer's Week 2007で最優秀学校賞を受賞

2007年で22年目を迎えるデザインイベント、東京デザイナーズウィーク。今回も都内の中心地・明治神宮外苑に中央会場を設け、「LOVE」をテーマとした様々なイベントが同時開催され、一般来場者、デザイン関係の来場者を合わせて8万人以上の来場者がありました。

『学生作品』では芸術学部デザイン学科の学生が19名（計14作品）出展しました。「地球環境に配慮した公園に設置する、ストリートファニチャー」をテーマとして国内37校、国外5校、全400点以上の作品が出展されていました。その中で、審査委員の投票による上位20点の中に、女子美生の作品が3点も選出され、講評会で公開されました。

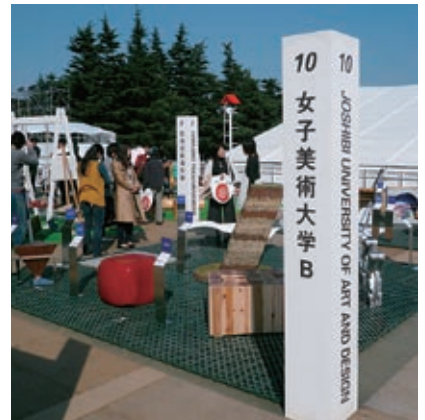
その結果、賞最高位の「グランドプレミオ学校賞（最優秀学校賞）」を女子美術大学Bチームが受賞し、個人賞でのプロダクトデザインコースの齊藤和知さんの作品が「プレミオ（優秀賞）」に選ばれました。女子美のA・B両チームの作品は、内外の多くの方々から賛辞をいただき、学生たちは大いなる自信と誇りを得たようです。

また、『コンテナグラウンド』では「edogawa3（えどがわきゅーぷ）」として、



女子美術大学A出展者(a雨宮玲子・b井川直子・c岩堀里香・d久保田真弓・e豊島友美・f齊藤昌子・g大栗麻子・h池谷夏美・i岩谷晴奈) 女子美術大学B出展者(k齊藤和知・m大野裕子・n綱木愛・o星いずみ・p山里佳子・q田村優・r中田喜和子・s藤原昌代・t古田絵里・u森下沙織) a~e・k~q(プロダクトD4年)f(ビジュアルD4年)g・r~u(プロダクトD3年)h・j(環境D3年) k・m・o(講評会公開作品)

本学の学生が多摩美術大学・東京造形大学の学生と、江戸川区の伝統技術工芸者とともに商品を制作するコラボレーション（江戸川区産業振興のプロジェクト）コンテナを出展しました。



グランドプレミオ学校賞（最優秀学校賞）
女子美術大学Bチーム



プレミオ（優秀賞）

齊藤 和知

「Bump（バンピー凹凸の痛み）」

W992× D550× H390mm 間伐材（杉）

コンセプト：“森林破壊”それは地球にとって重大な危機。人間が破壊した森林の痛み…それを感じ、森林への愛を確認するベンチ。

コメント：担当の先生方や友人の協力をいただいて完成することができた作品なので、受賞は皆さんに感謝するとともに大変嬉しく思います。制作において、素材の扱いの難しさやコンセプトの追求など、この作品を通してモノをデザインすることの楽しみを改めて実感しました。



「edogawa3」女子美生の作品

NEWS ● 7 北川フラム教授が国際交流奨励賞受賞

アートディレクターの北川フラム氏（芸術学部芸術学科教授）が、国際交流基金による2007年度国際交流奨励賞・文化芸術奨励賞を授賞され、10月3日に授賞式がおこなわれました。

国際交流奨励賞は、学術、芸術等の文化活動を通じた国際相互理解促進によって国際文化交流に大きく貢献し、今後もさらなる活躍

が期待される個人や団体に対して国際交流基金が1973年から贈呈している賞です。同賞は国際交流基金の事業の柱である「文化芸術」、「日本語教育」、「日本研究（知的交流）」の3つの分野に対して贈呈されており、北川先生は「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ」等の業績が認められ、「文化芸術」の分野で受賞されました。



NEWS ● 8 100周年記念大村文子基金

「100周年記念大村文子基金」は、創立100周年記念事業の一環として、平成11年に大村智理事長夫妻からの寄付を基に、設立されました。この基金によって運営されている「女子美パリ賞」(第9回)、「女子美制作・研究奨励賞」(第7回)、「女子美

美術奨励賞(留学生対象)」(第6回)、そして本基金の目的のために功績のあった方や団体に贈られる「大村特別賞」が以下の方たちに授与されました。また、本年度より「女子美ミラノ賞」が新設されました。

■女子美パリ賞

保科 晶子

平成2年 女子美術大学付属高等学校卒業
平成6年 芸術学部工芸科卒業
平成8年 美術研究科修士課程美術専攻陶造形領域修了



「goron-goron-goron 笠間芸術の杜公園・マジジャンクレーの杜」
Photo: S.ANZAI

■女子美ミラノ賞

伊原 真央

芸術学部デザイン学科 2年次在籍



「急加速ブーン」映像作品 2007年

島田 彩子

芸術学部ファッション造形学科 3年次在籍



「光を纏う」

■女子美制作・研究奨励賞

國吉 晶子

平成13年 芸術学部絵画科洋画専攻卒業



「My Room」200.0×200.0 cm キャンバス、油彩 2007年

藤倉 明子

平成10年 芸術学部絵画科日本画専攻卒業
平成12年 美術研究科修士課程美術専攻日本画領域修了



「track」F50 116.5×91.0cm 紙本着彩 2006年

城戸 みゆき

平成7年 芸術学部絵画科洋画専攻卒業



「教員住宅3号室からの眺め」
16×18×23 cm 紙・レンズ 2006年

■女子美美術奨励賞(留学生対象)

シム チェウォン
沈 采媛

国籍 韓国

大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画領域 1年次在籍



「遠い時空への入り口」油彩F120 2006年

ソ ミギョン
徐 美京

国籍 韓国

芸術学部メディアアート学科 3年次在籍



「台所」

リー ショク クワン
Lee Shook Kwen

国籍 シンガポール

短期大学部造形学科デザインコース 2年次在籍



「PASSIONFRUIT」

■大村特別賞

澤岡 泰子

昭和37年 芸術学部図案科卒業

「終わりのない壁画ワークショップ」

【選考理由】

神奈川県立の養護施設 中里学園において、2001(平成13)年より、数年の計画を立て、児童棟で「終わりのない壁画ワークショップ」プロジェクトを実施した。このプロジェクトを通して、児童福祉の向上に尽くしたことは、本学の理念の実現に貢献するため。

J A M ● 女子美アートミュージアム 展覧会情報

展覧会開催報告

「Glass Session 2007

ガラス表現の模索と試行」



ガラス教育者ネットワーク（通称 GEN）に所属する教育機関の学生作品展を開催しました。ガラス工芸の学科・コースをもつ国内の教育機関14校から出品された学生作品は99点にのぼりました。出品した女子美生は9月19日には学内対象のギャラリートークを実施、また会期中の土日にはボランティアガイドとして展示室で来館者の質問に対応するなど、大活躍でした。

（2007年9月12日～10月19日）

「第29回造形さがみ風っ子展」

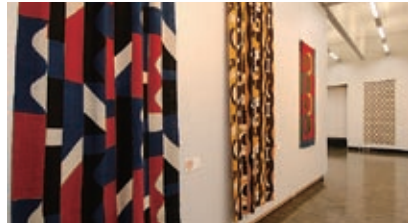


今年も、相模原市教育委員会主催による市内小中学校の児童・生徒作品展がJAMで開催されました。初日には、展示された作品群を前に、先生方が子どもたちの様子や制作過程を語り合い、造形教育のあり方を追求するための合評会が行われ、芸術学部デザイン学科井上悦治教授が講師として参加しました。

（2007年10月25日～10月29日）

「柳悦孝の仕事

～民藝運動と女子美工芸草創期」



染織作家・柳悦孝は、民藝運動の提唱者・柳宗悦の甥にあたり、女子美工芸草創期において中心的役割を果たした教員の一人です。本展覧会では、四本貫資などの作品と共に、柳悦孝の作品や織機を紹介しました。また「自らの手で美しい物を制作する楽しさと、それを使う喜び」を教育指針とした女子美工芸の活動の紹介として、日本橋三越で開催した「女子美術大学 染織工芸展」（通称三越展）の資料や、展示運営に協力した1970年の大阪万博・日本民藝館のコンパニオン制服なども展示しました。

女子美生限定トークイベント

「民藝ってなに？」

～柳悦孝のしごとの見どころ教えます～」



左手前より時計回り：短期大学部造形学科デザインコース教授 伊勢克也、芸術学部基礎教養系教授 原 聖、芸術学部工芸学科教授 清水明子、同学科教授 大澤美樹子、デザイン学科准教授 林 規章、同学科教授 飯村和道

展覧会関連イベントとして、11月30日に女子美生限定のトークイベントを実施。伊勢館長の司会により、ゲストの原聖先生、清水明子先生、大澤美樹子先生、飯村和道先生、林規章先生が、民藝について自由にトークを展開しました。JAM初の1ドリンクサービス制が功を奏したのか（？）、定員40名を超える盛況ぶり、先生方も学生もドリンクを片手にいつになく和んだ雰囲気の楽しいイベントとなりました。

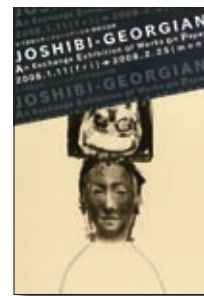
（2007年11月9日～12月10日）

JAM展覧会予告

「JOSHIBI-GEORGIAN An Exchange Exhibition of Works on Paper

女子美術大学・ジョージアン大学

国際交流展」



本展覧会では、本学大学院美術研究科美術専攻・芸術学部絵画学科洋画専攻版画コース・短期大学部造形学科美術コース、カナダ・ジョージアン大学デザイン視

覚芸術学部美術学科の両校の教員、助手、学生、卒業生たちによる版画、現代アート作品約80点をご紹介します。

ジョージアン大学は、カナダ・オンタリオ州バリーに位置し、60以上の学部課程と13の大学院プログラムを持つコミュニティー・カレッジです。2007年10月から11月にかけて、ジョージアン大学キャンパスギャラリーにおいて女子美術大学の作品展が開催されました。このたび、それに応えるかたちで、女子美アートミュージアムにおいてジョージアン大学の作品を、本学の作品とともに展示します。版画・現代アート作品による「競演」をお楽しみください。

（2008年1月11日～2月25日）

※同時開催

「平成19年度 女子美術大学・女子美術大学短期大学部 退職教員記念展」

平成19年度に定年退職を迎える教員による展覧会です。今年度は短期大学部造形学科美術コースの柳千代子教授の展覧会です。女子美ガレリア ニケで開催した展覧会がJAMに巡回します。

（2008年1月11日～2月25日）

Topics ●●● 3 公募展受賞者紹介

第43回神奈川県美術展

【準大賞】

松沢真紀（大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画領域1年）

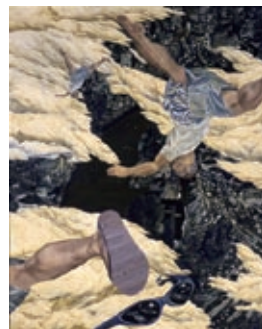
【美術奨学会賞】

堀井寿乃（大学院美術研究科修士課程美術専攻立体芸術領域2年）

【入選】

横田典子（大学院美術研究科修士課程美術専攻立体芸術領域2年）

吉見香奈（芸術学部立体アート学科4年）



【準大賞】「夜」 松沢真紀

Series ●●● シリーズ 女子美探訪⑧ タイトルをどうするか

卒業生で写真家の迫川尚子さんの撮る女子美のシリーズ第8回です。写真とエッセイをご紹介します。

いつもカメラを持って、街をとりとめもなく歩いています。ほとんど撮り散らかしたまま。たまに作品としてまとめます。何かの資料にするなら、年代別とか地域別とか題材別に整理するでしょうが、始めからそのつもりで撮っていないので、どこにもおさまらないような写真ばかり。

後から見返すと、どの写真も撮った瞬間の感覚は、鮮やかによみがえります。でもいつだったかどこだったか何だったか、さっぱり思い出せないことがあります。

いいの、いいの、私の場合、とりとめなさ感が出れば、と気を取り直して写真を選びます。どの写真も愛着があります。ただ人様に見ていただく以上、見方が厳しくなり、どんどんボツにします。百枚に一枚はキマった！という写真が（すごい確率です）あります。十枚に一枚は微妙な感じのがあります。

キマった写真ばかりだと息がぬけません。微妙な写真がけっこう隠し味になったり。そのバランスが難しい。ボツ写真をいっぱい混ぜた方が、とりとめなさ感が出るかも。でも、一枚一枚が良くなかったら、意味ない。結局、まだ写真が足りないんだと気を取り直して、街に出かけます。

さて、何とか写真がそろってきました。最後に足りないのが、タイトルです。どうしよう。変に凝らなくてもいい。さりげなくいこうと思って、リストアップしてみます。どれもしっくりこない。ありきたり過ぎたり、説明的過ぎたり、思わせぶり過ぎたり。



私の作品自体が、いつどこで何をどうしたのかハッキリしないのです。よけいに、空気がつかむみたいにもどかしい。

「日計り」は、私の生まれ故郷、種子島に棲息する、毒蛇（でも、毒はない）の名前です。これを写真集のタイトルにしたことで、急にすーっとしました。「日計り」という字面と響きが、写真を撮る行為に似てい

るからかな。

「日計り」じゃ、どんな内容かは相変わらずわかりません。でも、ちゃんとタイトルにおさまっている。いつもこういくといいのですけれどね。

迫川尚子（さこかわ なおこ）【写真家】
女子美術短期大学造形科 衣服デザイン教室卒業
[BEER & CAFÉ・BERG] 副店長
1/1～1/31 写真展「予感」 BERGにて

広報誌「女子美」の定期購読をご希望の方には毎号無料でお送りしております。ご希望される場合は、お送り先を広報入試課まで連絡ください。
また、広報入試課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせ下さい。
〈広報入試課〉 TEL. 042-778-6123
FAX. 042-778-6692
[E-mail] prs@joshibi.ac.jp

URL <http://www.joshibi.ac.jp>

発行 学校法人 女子美術大学
〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 企画部 広報入試課
制作・印刷 株式会社 日相印刷
監修 原田 松野
発行日 2008年1月10日